

ナバレーテ・エル・ムードとヴェネツィア派再考

―「スペインのティツィアーノ」としての画家像の形成をめぐって

河本真夕（神戸大学／北海道立近代美術館）

ナバレーテ・エル・ムード(1538頃-1579)は、スペイン国王フェリペ2世(在位1556-1598)によって造営が開始されたエル・エスコリアル修道院の装飾事業において重用された数少ないスペイン人画家である。早逝ゆえに多くの作品を残さなかったが、画家の伝記と各作品の描写は、修道院長ホセ・デ・シグエンサ師の著作『ヒエロニムス修道会の歴史』(1605年)に早くも記され、その後も幾人かのスペイン人著述家による著作に引用されたことで、19世紀までにはスペイン美術史の中の傑出した画家の1人に数えられていたことが確認できる。だが、2017年からエル・エスコリアル修道院で開催されている展覧会のカタログ序文にて指摘されているように、現在この画家の名前は一般にはほとんど知られていない。また、ナバレーテの評価史を取り上げている先行研究は少なくないが、いずれもこの画家が同時代から19世紀まで名声を轟かせていたことを示すのに注力しており、19世紀以降の評価の推移や変転については分析されていないのが現状である。

本発表では、こうした問題意識から出発し、ナバレーテの批評史を同時代から19世紀までたどりつつ、特にこの画家に付されてきた「スペインのティツィアーノ」としての画家像がどのように発展・定着したのかという点に着目したい。この異名は18世紀の美術理論家アントニオ・パロミーノの著作『スペイン桂冠画家・彫刻家列伝』(1724年)において初めて使用されたものであることはこれまでも指摘されている。だが発表者は、スペインにおける近代学問としての美術史の礎と言われる『スペイン著名芸術家歴史辞典』(1800年)において、著者セアン・ベルムーデスがスペイン美術の「系譜」を示す目的のもと、この異名をパロミーノから意図的に引き継ぎ、そのイメージを発展させたことを、この著者による未刊行の草稿から新たに指摘したい。

また、セアン・ベルムーデスの著作は、1816年にフレデリック・キリエによるフランス語抄訳がパリで刊行され、以後国内外で普及したことは重要である。19世紀前半にはナポレオンによるスペイン侵攻をきっかけにナバレーテ作品4点がパリへと渡るが、そのうち、ニコラ・スルト元帥の邸宅に飾られた《アブラハムと3人の天使》(1576年、アイルランド国立美術館蔵)は、テオフィール・トレの『スペイン絵画研究』(1835年)や他の美術雑誌に取り上げられるなど、当時パリで注目を集めたことが窺える。発表の後半では、本作がナバレーテ作品の中で最もティツィアーノ様式を示している作品であり、この画家に付された「スペインのティツィアーノ」としてのイメージをより強固にしたこと、さらにシャルル・ブランの美術全集など当時執筆され始めたスペイン絵画史に組み込まれたことで、このイメージが定着し、現在にまで至っている可能性について考察したい。